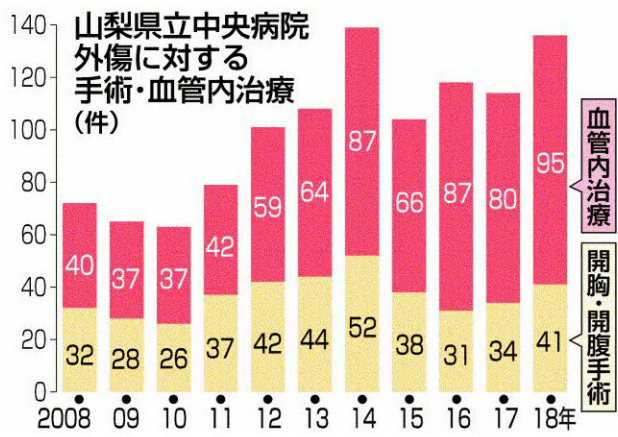


山梨県唯一の高度救命救急センターがあり、24時間体制で重篤な救急患者を受け入れている県立中央病院。同センターの萩原一樹医師(34)

やまなし 医療最前線  
令和を担う  
県立中央病院から  
(183)

は、ドクターヘリやドクターカーで現場に駆け付け、患者の初期診療や手術、入院管理に当たる。「患者さんの命を守る『最後のとりで』として使



命を果たしたい」

車社会で交通事故が多く、登山中の滑落事故も多い山梨。果樹栽培が盛んなため、昇降機などでの農作業中の落下事故も少なくない。そのた

高度救命救急センター・萩原一樹医師

「最後のとりで」使命果たす

め、同センターでは重症外傷患者の搬入が多いのが特徴。2018年は外傷患者の搬入が860件あり、そのうち510件が重症例だった。同センターは、「さまざまな専門分野を持つ救急医や看護師がチームを

組み、スピード感を持って対応できるのが強み」と萩原医師。自身は重症救急医療のほかに外科手術と血管内治療を主に担当。同センターでは重症外傷に対し、侵襲が少ないカテー

テルによる血管内治療を積極的に取り入れている。「血管内治療の細やかさと外科手術のダイナミックさ。目の前の患者さんの状態から、それぞれをバランス良く取り入れ対処したい」



はぎわら・かずきさん 2009年山梨大医学部卒。県立中央病院での初期研修後、横浜市東部病院、日本医科大学付属病院助教を経て17年から県立中央病院勤務。救急科専門医、外科専門医。34歳。1児の父。

萩原医師は6月から2カ月間、救急・外傷領域における日印の人材育成交流事業で、インド研修に派遣された。インドは3分に1人が交通事故で死亡していると言われるほど事故が多く、全インド医科大外傷センターでは、交通事故による外傷をはじめ日本ではまれな銃やナイフによる外傷の手術も体験。一経験がないと対応は難しい。教科書でしか見たことのない症例を生で経験できたことは大きい。東京五輪を控え、重大事故や凶悪事件など、もしもの事態に備える意義を感じた。

大月市出身。中学時代に救急医にあこがれ、都留高から山梨大医学部に進学。県立中央病院で初期研修後、横浜や東京の病院で外科と救急科の経験を積み、2017年に再び同病院に戻ってきた。

救急搬送の多い同病院では、毎日のように手術や一刻を要する処置がある。週に1、2回は夜勤もある不規則な勤務だが、近年は働き方改革も進み、休みの日には子どもと遊ぶなどしてリフレッシュ。「救急医の仕事は確かに大変だが、患者さんが元気になって帰って行くのを見るのが何よりもうれしい」。山梨の救急医療を支えていく覚悟だ。